

令和4年度第1回横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会	
日 時	令和4年4月27日（水）14時00分～16時10分
開催場所	横浜市役所18階 共用会議室みなと1～3
出席者	有本委員、池田委員、内田委員、内海委員、宇野委員、小林委員、佐伯委員、佐藤委員、塩田委員、鶴見委員、名和田委員、西尾委員、星委員、本宿委員、増子委員、山田委員、山野上委員、坂本委員（18名）
欠席者	赤羽委員、生田委員、川村委員、福本委員、（4名）
開催形態	公開（傍聴者なし）
議 題	<p>議事【議事1】委員長の選出について</p> <p>【議事2】職務代理者の選出について</p> <p>【議事3】第4期 横浜市地域福祉保健計画中間評価【手順2】【概要版】の確定について</p> <p>【議事4】第5期横浜市地域福祉保健計画の策定について</p> <p>ア 第5期 横浜市地域福祉保健計画策定にかかる分科会について</p> <p>イ 分科会意見交換参考資料について</p> <p>意見交換 テーマ①：「複合化、複雑多様化する地域の課題について」 8050問題、ひきこもり、いわゆる「ごみ屋敷」、生活困窮など制度の狭間の課題への支援について</p> <p>テーマ②：「コロナ後の地域の変化について」 人と人のつながりや社会的孤立、地域活動の状況、今後必要な取組、第5期計画策定に向けて大切な視点・キーワード</p> <p>報告【報告1】第4期 横浜市地域福祉保健計画『区計画』策定状況（令和3年度～令和7年度）</p> <p>【報告2】「個別支援と地域支援の融合Ⅲ～「身近な地域のつながり・支えあい活動推進事業」の取組から～」 「よこはまの地区社協活動～地区社協データ&事例集～（令和3年度版）」の発行について</p>
決定事項	<p>【議事1】委員長に名和田委員が選出された。</p> <p>【議事2】職務代理者に西尾委員が指名された。</p>
議 事	<p>開会</p> <p>議事</p> <p>【議事1】委員長の選出について</p> <p>・委員会運営要綱第6条に基づき、委員の互選により名和田委員が委員長に選任された。</p> <p>【議事2】職務代理者の選出について</p> <p>・次いで、名和田委員長の指名により、西尾委員が委員長職務代理に指名された。</p> <p>【議事3】第4期横浜市地域福祉保健計画中間評価【手順2】【概要版】確定について（事務局）資料1、2について説明</p>

(名和田委員長) コロナ禍で、ある区で市民活動調査を行ったが、福祉系の身近なところでボランティア活動をされている団体からの回答が少なかった。20年前に同じ調査をしているが、そのときは回答していたところが随分抜け落ちており、休止されているのか、コロナ禍で回答ができなかったかは不明だが、そういう貴重な団体が今回見えなかったということ非常に心配している。住民により身近な地域での取組を支援していくという視点がますます重要ではないかと考えている。ご質問があればいただきたい。

(内田委員) (資料1について) 推進の柱2の重点項目2-4「幅広い住民層が取り組む地域の健康づくり活動の充実」に「こどもから高齢者まで幅広い世代へ身近な地域活動への参加を呼びかける」と書いてあるが、障害者に関してはどこに書いてあるか分からない。いろいろな障害者がいて、障害者の健康づくりをどう考えているのか、そこに含まれているのかが分かりにくいので、もう少し説明していただきたい。

(事務局) この健康づくりについては、障害者の方も含めてのものと考えております。概要版ということもありますが、表現の方法として明確に出ていないというところは御指摘のとおりで、今後検討していくに当たってはそういった視点も持ってさらにこの計画を進めていきたいと考えております。

(名和田委員長) 概要版なので全ての思いを書くことは難しいが、今の御発言の趣旨を受け止めた上で、当然の前提としてあらゆる属性の住民について述べられているという理解をこの委員会として確認しておきたい。事務局も推進に当たってぜひ留意いただきたい。

【議事4】第5期 横浜市地域福祉保健計画の策定について

(事務局) 資料3について説明

(名和田委員長) 今後の具体的な議論内容については、委員の皆様のお考えもこの後の意見交換の場で伺いたい。この策定のための組織体制に限って何か質問があればお願いしたい。少し複雑であるが、社会福祉協議会がずっと行ってきた地域福祉活動計画があり、その資産を引き継いで地域福祉保健計画も立てていると思うが、横浜市では社協のやっていた活動計画と、市が策定・推進している地域福祉保健計画を一体的に策定することになった。その中で社協が取り仕切っているのがこの検討会となり、それを条例上の位置づけで整理をするとこのような言い方になると思う。さらに今回は第5期の策定作業があるので、そのために分科会を設置し、原則的に皆様方にはどちらかの分科会に入っていただくことになる。すぐには理解しづらいところがあるので、次の分科会の説明を承りたい。

(事務局) 資料4について説明

(名和田委員長) 分科会1と2は原則として全ての委員にどちらかにお入りいただくことになる。希望を伺っているが、必ずしも自身の希望のとおりでない委員もいると思われるが、いずれにしても地域をどう良くするか、地域福祉をどう推進していくかという観点からすると、多くの部分で重なる議論をすることになると思われるので、このような形でご了承いただきたい。

(事務局) 資料5-1～6について説明

(名和田委員長) 資料説明、ありがとうございました。

意見交換

(名和田委員長) 第5期策定に向けたウォーミングアップ的な議論や、地域で感じられている重要な課題や動き等について意見をいただきたい。(1)が複合化、複雑多様化する地域の課題ということで、まずこれについて議論を行い、次いで(2)としてコロナ後の地域の変化について議論していきたい。

本委員会は委員の数が多いので、時間の関係や、特に今はコロナの関係で会議時間をあまり延ばすのも問題があるとのことなので、全員が発言できていない事態が続いているが、なるべく簡にして要を得た発言をしていただき、積極的に御発言いただきたい。特に今期から委員として御着任いただいた方には、ぜひ御発言をいただければと思っている。

(山田委員) 今回初めて、市民委員として参加させていただきました。福祉のことで自分の中で一番大きいのが、私の息子は精神障害の統合失調症である。そのことで家族としての取組をずっと今までやってきて、病院の中の家族会と地域の家族会の2つに関わってきた。その両方に共通して言えることであるが、家族に精神障害を抱えている人の家族会の参加率が大変低い状態がずっと続いている。家族会以外にも、浜家連(特定非営利活動法人 横浜市精神障害者家族連合会)という大きな組織があるが、そこでも大きな課題のひとつになっている。

泉区にいずみ会という家族会があり、家族会に参加している世帯はわずか30世帯である。一体、残りの家族の方はどうされているのかと思う。今日もお話に出てきた「我が事」と言うのは、当然家族のことを思っているが、その中で一番大きな問題は、どうしても世間の偏見に対する恐れから自分の子どもがそういう状態であることを人に言えない雰囲気がずっとあり、私も実際に子どもを抱えている中で、本当にどうしようもない状態がずっと続いている。病院に行って入退院を繰り返すことが大変多く、中には10回繰り返して、それで人生が終わってしまうケースもある。どうしたらそういう人たちと一緒に考える場に連れて来られるか、この点が大きな課題である。行政や色々な所の応援をといても、実際の大きな問題としては、個人情報の問題もかなりあり、それがネックになってなかなかご家庭の中まで声をかけることができにくい状況がある。

もう一つの大きな問題は、皆様も御存じかもしれないが、今、国は精神科病院に入院している人を地域に戻すということを進めている。実際に精神科病院の入院病棟を閉鎖しているところもあり、そういった状況で自分の家に帰ってくるが、この先どうなるのだろうかという不安を抱えている。

それでも家族会に出ていけばまだ相談もできる。何も相談ができないで頭を抱えている状態の人が、把握しているだけで約2,000世帯いる。実際は、もっと多いのではないかと考えている。その中で30人程度しか家族会に来ていないということを考えてときに、これから先どうやってそうした人たちの生活を守っていくのかということを非常に懸念している。いろいろな問題があったが、私の場合は息子を抱えている身でもって、切実な思いで今日はこの場に臨んでいる。ぜひ皆様のお知恵もいただきたいと思っている。

(名和田委員) 大変重みのある発言をありがとうございます。振り返ってみると、第1期でも同じような議論をした記憶があり、深刻な話である。地域における偏見や、家族の方々の無力感とか、今の発言からするとあまり改善されていないように思える。この問題は、微力ながらこの委員会でも少し考えていく必要があると感じた。

(本宿委員) 私は金沢区の生活支援センターなのですが、家族会について話をすると、先日金沢区の家族会の総会があり、山田委員からお話があったように、非常に閑散としていた。地域ごとに課題は違うのかもしれないが、金沢区の家族会で懸念されているのは、先ほど高齢化の話が統計でも出ていたが、家族会の高齢化、後継者不足の状況になっており、数年前から家族会の存続・維持が課題となっている。今、コロナで外出するのが難しい状況を考えて、家族に求められる割合の比重が大きくなっており、このような状況では、家族会への参加が非常に大事になると思う。私の担当エリアの家族会への参加率について把握はしていないが、非常に貴重なお話を伺えたので、自分の担当エリアでも少し調べてみたい。

生活支援センターは、精神障害の方の相談と居場所を提供している各区に1か所ずつある事業所である。生活支援センターとして今までは相談に来られた方への支援をおこなってきたが、コロナ禍では出てくるのもなかなか難しい状況である。しかし、訪問できるのかということもコロナがあって難しい。今、どのような支援をしていけばいいのか、生活支援センターも模索している状況である。今回の資料に出ている統計や、この後の皆さんの意見を持ち帰り、生活支援センター全体としても課題に取り組んでいければと考えている。

(宇野委員) 私は市民委員で今回初めて参加する。妻と2人の子どもと暮らしており、困りごとといえば、子どもが内斜視であることが判明したぐらいで、これはメガネをかければ矯正ができる問題であるし、共働きをしているので、お金もそんなに困っておらず、現状では本当に何も困っていない状況である。

ただ、周りを見ると、困っている人が多くいるにも関わらず、誰か助けてあげればいいのかと思ったときに、何もできていないと感じている。ネットを見ると困っている人がいることは分かるが、身の回りにそういう人たちがいるのかということも全然知らない状況である。ただ、知ることができれば、自分は人との会話や関わるのが好きなので、助けることができ、笑ってもらったら、それはうれしいなと思っているが、知らないからできないという人は多くいると思う。そういう人達に何をしたらいいのかと考えると、やはり情報発信ではないかと思う。どう情報発信すればいいのか分からないが、スーパーなどの広告を打つのも良いかもしれないし、こういう人が周りにいますよ、という話から始まるかもしれない。知らない人に対して情報発信をしていくことがまずは大事かなと思っている。

もう一点は、知っているけどやらない人もいると思う。困っているのは知っているが、面倒や恥ずかしいとか、そういう意識がある。例えばペーパーテストで、「困っている人がいます。助けますか？助けませんか？」となったらみんな

「助けます」に○をつけると思うが、実際はやらない人が多いと思う。大人になって「ありがとう」「ごめんなさい」が言えない人が大多数いると感じているが、なぜそうってしまったのかと考えた時に、幼少期に身に着けた価値観等が影響している人も多くいると思っている。この点に手を打っていかないと、仮に来月ボランティア参加者が増加しました、ということがあっても、継続的には続かない。根本的に手を打つのであれば、教育という場に早い段階で入り込んでいくことが大事だと思う。

地域福祉保健計画というのを聞いたときに、今日も初めに動画を見せていただいたが、温かい感じで楽しいと思った。しかし、一般的な人が聞いたら真面目や硬い、大変そうだなというネガティブなイメージが強いと思う。子どもも大人も、人は根本的に楽しいことやワクワクすることでないやらないと思うので、意識の面から変えていく必要があると感じた。例えば、私の子どもたちに対して、友達と遊ぶのは楽しいと伝えているが、これは頭で感じるのではなくて、実際遊んで、友達と遊ぶことはとても楽しいことだと体験したところから、初めて子どもの意識や行動が変化し、また友達をつくっていこう、という発想になると思う。その上で、ボランティアにも伝えるだけではなくて、体験や共感する場、もっとやってみようよ、と後押しすることが大事であり、根本的なところから変えていかないと、多分変わらないのではないかと思っている。自分自身もまず身近なところでやっていきたいと思う。

(名和田委員) 高校でキャリア教育にも関わられているとお聞きした。これもいい切り口だと思う。高校では、地域と結んでボランティア活動しているので、そういう意味で非常にいい切り口を出していただいたと思う。次の分科会でも今の議論をつなげたいと思う。ありがとうございます。

(塩田委員) シルバークラブの塩田です。現在、高齢者の中でもコロナ禍での問題が非常に多く出ており、シルバークラブの支え合いのメンバーそのものが年々減少している。私は港南区に所属しているが、横浜市老人クラブの副理事もやっております、これからの老人クラブの在り方をどう進めていくかについて、活性化プロジェクトをつくり進行中である。

一つは新しい仲間づくりの進め方や、解散・退会をどうしたら防止できるかといったプロジェクトを進めているが、あれはできない、これはできない等、非常に後ろ向きでネガティブな発言が出てきてしまう。それを何とかポジティブに考えて、できる方法や防止策、仲間を増やすにはどうしたらよいか等を考えており、ポジティブに物事を考えながらも活性化プロジェクトについて、今、横浜市で取り組んでいることを報告したい。

もう一つは、昭和56年に市の行政の委嘱として老人福祉推進員制度が設けられ40年になるが、これを老人クラブが受けて、友愛活動推進員というのを各地区で7,000人程が委嘱を受けて活動している。この活動は、基本的には孤独になっても孤立させないために今後きちんとスケジュールどおりにやっていくこと、見守りも必ず重ねていくこと、みんなが話し合える居場所やたまり場づくりを考えていくこと、日常生活の中で困りごとがあったら助け合えることをみんなでやっていこうで

はないかということをや愛活動の骨子として進めている。これらを継続的に続けられるように、それぞれが役割をきちんと理解し、友愛活動7,000人がこれからの地域を支える、また高齢者を支えるメンバーにしていこうという考えで推進している。この策定計画と同時に会員ひとり一人にそういったことが伝わっていくように、これからも努めていきたい。

(池田委員) 昨日、孤独死が見つかったという報告があり、打ち合わせをしてきた。孤独死の問題は、早く見つかったのがよかったというのが現状で、なかなか見つけるのが難しい状況である。老人クラブさんのお話でもあったが、友愛活動というのが限界にきていると感じている。私の地区でもそうだが、老人クラブそのものが減っている。みんな高齢化してしまって、役割分担する人が誰もいなくなってしまった。会計もやれない、することも嫌だという人も多い。6つあった老人クラブが4つに減ってしまった。友愛活動というのは、私は地区社協の会長もやっているが、老人クラブ内での活動で終わってしまっている。要するに老人クラブに加入していない人をどうやって地域で保護していくかということも含めて横の繋がりも考えていかないと、どんどん歯が欠けてしまったような状態になっている。

ある地区の団地の話しでは、団地の中は誰がどこに住んでいるかがすぐ分かってしまうこともあるが、高層住宅が多い地域ではなかなか難しい。これからの福祉は、目に見えないところの人達をどうフォローしていくか、これはもちろん老人クラブさんも一生懸命やっていた必要があると思うが、全体としてはそういった方向に輪を広げていかないと難しいかと思っている。

最後にもう1点。1番のところで、地域の課題の中に「生活困窮等の制度の狭間の課題」というのがあり、資料の中に支援金の申請件数が大変増えた、というのがあったと思う(資料5-2)。国から委託を受けて実施しているのは神奈川県社協で、私は神奈川県社協の理事もやっているが、実際にそれを受付し、処理しているのは、横浜市の各区の社協となる。皆さんはお金が借りられるとなると相談に来るが、来てからが大変である。必要な資料があるかないかをチェックし、きちんとしたものを県社協のほうに送って、県社協が承認すれば良いが、承認されないケースも結構ある。その理由はよく分かっていないが、そういう問題がある。また今年から返還が始まるが、借りたお金は返金義務があるので、どうやって返していくのかという点が課題になると思う。返金不要のお金もあるが、全員がそうではない。その辺りを見極めていく必要がある。

コロナの問題が出たことで、埋もれていた生活困窮者の人が出てきた。各区の地区社協も公民館や自治会館を利用して頒布会をやっている。私が担当している旭区はもう10か所ぐらい実施したが、実態がつかめず、追いつかない状況である。以上のことも含めて、横浜市全体でこのような問題を身近なものとして捉え、どの方向性を向いて行えば温かい横浜市になるのか、この点も課題の一つと考えている。

(宇野委員) 老人クラブに入る・入れないという話で、私は普段関わっておらず、そういうことはなぜ起こっているのか、それに対して何かできること等はあるか。

(池田委員) それが困っている状況なので、一生懸命考えているという話しになる。

(塩田委員) 私どもとしてはそれが一番の課題・問題とされていて、人口が増えているのになかなか参加できず、いろいろな問題が起きてきている。一例として、今年の始めに当局から老人クラブの現状と課題について横浜市内の町内会連合会の資料にこの現状をつけて、老人クラブの会員以外で自治会でまだ加入されていないところをお願いをしていこうとなった。老人クラブの加入の有無ではなく、友愛活動は、地域全体を見ていくシステムにしていかねばならない。それには地区社協、民児協、町内会の皆さんの協働を得ながら実践は老人クラブで対応し、会員以外でも地域全体が活動に参加できるようにしていく必要がある。本当に難しい問題だが、これからも長く継続していけるように、このような体制で進めているところである。

(名和田委員長) 老人クラブについては、必要であればまた事務局から資料や説明をしていただきたい。

(池田委員) 老人クラブはなぜ人が増えないのかと言えば、老人クラブは何歳から加入するものなのかという点も大きい。昔は定年が50歳というのがあったが、今は60歳になり、年金がもらえたり、自分の好きなこともできるようになった。今は65歳まで徐々に延びて、70歳まで働けという状況では自分が稼ぐことで手いっぱい余力を持って他のことをチャレンジする雰囲気がないのが、一番大きいと思う。加入する必要性をどう感じさせるか、これが一番大事だと思っている。

(名和田委員長) 今、地域についての意見が多く出てきたが、一方で諸課題を地域に返すという動きが随分強まっている。その意味では、資料説明の中にも民生委員、児童委員を対象にした研修会なども設けられていて、ますます期待は高まっている。反面、課題も増えている時期に当たって民生委員としてはどのように感じているか。小林委員お願いできますか。

(小林委員) 民生委員児童委員協議会の小林です。8050問題、ひきこもり、ごみ等々の複雑多岐にわたる地域の問題について、非常に論理的、理論的だが、この内容について具体的に書かれていない。今後の問題として問題解決を具体的にどうするのか。高齢、障害の問題や老人会の問題等、この方向においても市・区・社協・地域ケアプラザでも枠組みはできている。個々が動いていても連携を取らないため、最終的な問題解決にまで至っていないのではないかとということがみてとれる。民生委員・見守り役としては、色々なことをお伺いして対応しているが、それに対してコーディネートをどうするかということを、今後、皆さんと一緒に検討していったほうがよいのではないかと感じた。

(佐藤委員) 横浜市自治会町内会に入っている神奈川区の佐藤です。私も自治会長を長くやっているのですが、非常な苦しみでずっと来ている。見守り一つを取っても、老人会・自治会・民生委員が行っていて、いろいろな組織が担当しているが、組織だけは縦割りになっていて、下に行くと同じ人がすべて担当している現状がある。それで私は、4年程前から縦割り組織をやめて、うちの連合で横の繋がりとして簡単に役割を決めた。極端な例で言うと、朝起きたら自分の家の前後・右左をみてその家がどうなっているか、朝起きたら雨戸が開いているか、電気が消えているか、夜になると雨戸が閉まったか、街路灯がついているか、朝おみそ汁の

においがするか、夜になったら御飯を食べているか、そんなことを感覚で分かるようにしなさいということをやっている。そうすると責任感がなくなり、朝起きて、自分の家の前後を見て、おじいちゃん、おばあちゃんはどうしているかなど、それだけでよい。もし雨戸が閉まっていなければ、民生委員や自治会長にすぐ知らせてもらっている。今年になって2人が私のところに知らせに来て、あそこの家はずっと雨戸が閉まっているということがあり、色々調べたら、たまたま近所に何も言わないで入院していたそうで、ほっとしたと同時に良かったと思うことがあった。あまり杓子定規に決めて、誰がどこを見る、というようなことをやらないで、今言ったように、フランクに隣の家はどうしているのか等、神奈川区ではやっている。

また、神奈川区で困っているのは、先ほど老人会の話があったが、加入者が増えないことである。この統計を見て、自治会の加入率がなかなか伸びていかないのが現実である。最後の5-6のページに書いてあるが、まず仮定として、両親が住んでいる家があり、両親が亡くなると今度はその家を売却する。そうすると1Kのアパートがいっぱいできる。そこには単身者が入ってくるので、私達は担当を決めて自治会に入ってくださいとお願いに行くが、若者は自治会に入ることはなく、入ってもメリットがないと言っている。そんなことで世帯数だけは増えているが加入率は増えてこないで、自治会・町内会の加入率が低下してくる。若者は近所付き合いがないので、だんだん自治会の加入率が減少している。今、総動員して、引っ越してきたらすぐ、隣の家の方に自治会に入ったらどうかと声かけ運動をやってもらっている。どのぐらい成果が上がってくるかわからないが、隣近所の付き合いが、一番の原点だと思っている。福祉の見回りでも、近所同士でちょっとした気配りが一番大事だと思っているので、そういうことをやりながら隣近所の絆を深めているところである。

(名和田委員長) 私も地元の自治会で役員をやっているので、よく理解できる。私は研究の上では自治会・町内会のことを研究しており、本当に加入率低下は頭の痛い問題だと思う。やはり地域福祉に取り組む中でそれを回復していく視点も大事だと個人的には思っているので、ぜひこの委員会でもそういったことを議論していければと思う。

先ほど、(1)と(2)を分けてということで行ってきたが、こういう形で少しずつ議論が進んでいるので、以後、(2)コロナ後の地域の変化についてということも念頭に置きながら、もう少しだけ議論を継続してみたいと思う。

(増子委員) 保健活動推進員をしている増子です。保健活動推進員は、地域の世帯数に応じて町会長より選ばれるが、最近推進員を受けの人が少なく、私の地域では8人も減った。老人クラブや自治会役員と同様、役を受けてくれる人が少ない。

保健活動推進員の活動は、住み慣れた地域でいつまでも明るく楽しく過ごしてもらうことを目標に活動している。以前は友愛活動の方と訪問活動をしたが、今では私達で地域の皆さんへの声かけや見守りなどの活動を続けている。

コロナ感染症防止措置発令中は、保健活動推進員会の活動は休止でしたが、地域での活動の一つ「ひざ痛予防体操教室」は、地域の皆さんの「いつからやるの?早

く会いたいね」という声が聞かれたので、感染症予防対策をしっかりと4月より開催した。

私達の活動を7月発行の「鶴見・あいねっと」冊子に取り上げていただき、PR動画の取材も受けました。楽しく活動する様子を見て、一人でも参加していただければ嬉しい。

保健活動推進員では、地域の健康づくりや子育て支援・親子の居場所など、皆さんのため、自分のためにも頑張っている。

(名和田委員長) コロナ禍の下でも4月からは少しずつ落ち着いてきた。再開できたのは、従来から力があつたということ。大変結構なことと思う。ありがとうございます。

(山野上委員) 市民セクターよこはまの山野上です。市民セクターよこはまは、この1階の市民協働推進センターを受託しているが、どんどんと力を持って積極的に参加する団体、活動者がとてもたくさん増えている。一方、老人クラブや障害者の親の会が全然機能しなくなっている。ネットで個人的に情報が取れるので、横の繋がりはなくても情報が取れるという環境があり、その点では昔に比べたらとても良くなったと思うが、ネットで話していることは余談がないので、その中であれをやろう、これは助けてあげるといった繋がりが減っていると思う。

私はセクターから独立した移動サービス協議会という高齢障害の移動の問題を考えるネットワークにも関わっているので、圏域の老人会の皆さんから、送迎の問題があるので説明に来てくださいと言われて、あちこちに行くことがある。シルバーの方達が、これから車で送迎というのはリスクも高いし、そういうところでの送迎は、車の移動のみならず、一緒に食事会に行くとか、今日は食事会がありますよ、というような声かけをするとか、それだけでも移動支援であることを伝えながら活動している。逆に地域の若い母親達は保育園の送迎で困っている。障害児の親もそうだが、自分の具合が悪いと子どもを出せず、そういうときに年配の方が一緒に付いて歩いてくれたら、そこで繋がりができて、お互いに助け合いができる。やることがないというのは、いろいろな支援をするだけではなくて、その地域のヒーローをつくっていかうよ、という話をちょうど昨日話しをしていたところである。やることがない、このことが一歩を踏み出す気力に繋がっていないと思うので、今までの支援や何かサポートサービスを生み出すだけではなくて、今度、何かやってみたいという宇野さんのような方に声かけをして、やってみる楽しさをどんどん広げていくのがいいのかと思っている。

また、高齢障害サービスが完全に別々である。私の関係する移動サービスでは、サービスBと障害者の就労継続B型というのをやっているが、制度では一緒にやってはいけないので、間に扉を閉めていないといけない。ここが交流するととても良いと思うので、制度の縦割りではなく、もっと大きな目で広がっていくといいと思う。

(有本委員) 有本と申します。横浜市立大学で保健師学生の教育及び地域貢献に携わっている。様々なことに対応する気軽な相談の場という観点では、教育研究地域貢献の一環で、ふらっと立ち寄れる場での相談を取り組んだことがある。金沢区

のケアプラザと一緒にショッピングセンターイオンや公園等で、当時はコロナ前だったので、お茶等を出しながら行った。泉区でも子育ての関係で話し合いをした際には、出られない人を日頃の生活の場であるスーパー、ドラッグストア、場合によっては美容院、理容院等の場で何かできないかという意見が出ていたので、そこに多様な人たちが関わっていくのも一つかと思っている。子育て応援と見守りの裏表になった飾り物を泉区では話し合って作り、そういう活動も一つかと思っている。

もう一点は、知っていく、情報提供という観点では、今、大学の学生たちも実は関心は持っているが、授業の中だったりしないと、なかなか関わりが持てないため、地域と関わってもらう取組を教育で行っている。その中で去年アイデアが出たのが、金沢区の地域福祉保健計画を推進するためのカナチューブという動画を若者向けと高齢者向けにつくれないかというアイデアが出て、これから区役所の方と何かつくっていこうという話も出ている。また今年も授業の中で、この横浜市の地域福祉保健計画の推進に向けた大学生のアイデアを募るような事業を進める予定なので、どんなアイデアが出るか分からないが、報告できればと思う。

(名和田委員長) 私のゼミでも聞いてみると、小さい頃お祭りに出て楽しかったとか、地域と関わって楽しく過ごしてきた等、学生は本当に関心があると思う。まさに第4期の地域福祉保健計画を教材にしているが、ほとんど何も知らない。うちは政治学科だから当然かもしれないが、そこは大いに育てていく余地があると感じた。

(星委員) ぱあとなあ神奈川の星です。成年後見の活動については、皆様の活動の最終的なところで、本人の生活が難しい状況で身上保護や金銭管理の部分でお手伝いをしている。中核機関もできたことから多くの案件の依頼があるが、印象的な部分としては、最初の山田委員の話にもあったが、親亡き後の子どもへの支援・親が生活を見ていたが高齢化で見られなくなったので後見制度を利用したいという方が増加してきている。また、独居生活者が認知症を発症して、その方を支援する身内が全くいない方への支援がどうしても必要なため、最終的に成年後見を活用する依頼が今かなり増えてきている。

ここに出ている地域の課題と密接なところがあるが、お金の管理であったり、お金はあっても色々なサービスを活用することができなくなってしまうような方が生まれないように、成年後見の制度を活用していただいて、支援させていただければと思っている。今後、そういう課題は色々あると思うので、成年後見の視点から一緒にお話をさせていただければと思っている。

(名和田委員長) 成年後見制度の運用は、地域とも非常に関係があると思っている。ぜひそういう立場で今後も御貢献いただければと思う。ありがとうございます。

(坂本委員) 横浜市歯科医師会の坂本です。コロナ禍になって生活が本当に変わってしまい生活困窮者の家庭やこども食堂を利用している家庭では、経済的に手いっぱい歯どころではない方も多く、学童期の口腔機能の健全な発達等に影響してくる。コロナになり家庭内にいるので、DV、子どもたちの虐待、ネグレクトといったことが歯科健診から分かることもあるし、若い人の生活リズムが狂ってし

まって、口の中の健康状態が悪くなるというデータも出ている。歯科医師会としてはそういうところで何かできないかという動きがある。

私は磯子の住宅街で開業して30年くらい経つが、開業したときに50代の方が70代、80代になっていて、昔から通院している方がお年を召していろいろと変化してきているので、しばらく来ないなと思うと、近所の方にあの方は元気？という話もしながら診療を行っている。口の中の治療なのに歯科の場合は割と話をすることが多い。何が食べられる・食べられない、こんなものを食べたら歯が折れてしまった、出かけるのが最近は少し面倒くさいやしゃべりにくい等、そういったところから分かってくるものが多くある。敷居が高いところからではなく、同じ目線で、自分たち地域の福祉について歯科医師会として何ができるかを考えていきたいと思う。

また、診療室の中からだけではどうしても気がつかないことも多くあり、こんなことはどうなのとか、こういうときはどうしているのかとか、そういうことがもしあったら気軽に質問いただければと思う。

(名和田委員長) 都筑区の委員会の際、歯科医師会の先生には随分熱心に関わっていただき、大変ありがたいと思った。口腔という面からの切り口で、我々にとっても斬新で重要な指摘を頂いたと思う。ありがとうございます。

(鶴見委員) 心身障害児者を守る会連盟の幹事の鶴見です。守る会連盟は、障害や難病のある人の親で運営しているが、頑張っているもの、運営者のなり手がいなくなったり、親自身が歳をとり、だいぶ苦勞をしている状況である。幹事たちは昨年、一昨年と毎月の幹事会を全て対面で行うほど、熱心に活動している。

障害がなかなか理解されないことがあり、特に「内部障害」は一般的な言葉になっていない。外からは分かりにくく、見た目では分からないため、普通の人とあまり変わらないが、内部的には非常に重い障害を持っている人がたくさんいる。その人達には、色々な支援が届いていない。横浜市や国はいろいろな支援制度をつくってくれているが、その対象から外れてしまう狭間にいる人たちが私たちの団体の中には多くいるので、その情報を今後いろいろな部会等で皆さんに伝えさせていただければと思っている。

(名和田委員長) 分科会で活発に御議論いただけそうな第一歩となり、委員長としては非常に大きな成果だったと感じている。ありがとうございます。西尾先生、一言いただければ。

(西尾委員) 「複合化、複雑多様化する課題」というのは、地域共生社会の中では必ず枕言葉のように言われ、このような状況が増えているということだが、現状を踏まえると、自分で困っているという問題認識と、周りが困っている・心配しているという問題認識の間に随分ずれがあって、そこに隙間や狭間がかなり生じていることが、一つ大きいのではないかと感じている。困っていても人に言えない、助けて欲しい、困っているということが配信できない状況にある人を、制度や政策がこれまでは「対象者」というふうに捉えて、その人を地域社会の「仲間」や「一員」として捉えていない。対象者として捉えられてしまうと自分らしく生きることが否定されているように感じて、どうしても追い込まれてしまう。そうなってま

で援助を利用するかというようなどころにも非常に距離があるのではないかと思っている。だから給付やサービス中心の福祉や縦割りをどう繋いでいくのか。よく言われる支え手と受け手が入れ替わるようなことが目標になっていると、生活困窮等で色々と試みられてきた、働いて給料を稼いで自立していく、経済的に自立していくという方向ではなく、地域の中で仕事を見つけてつくり出して、コミュニティの中で役割を持って生きていくことが、一員として生きていけるということなのかと思っている。

政策的な方向から言うと、包括的な支援体制づくりをすれば、行政や専門職がそれをつくって地域と連携していけばいいのかという方向が打ち出されている訳だが、横浜市はこの問題を地域福祉保健計画の中心的な取組課題として捉えられているので、地域がどうつくっていくかの課題が提起されて、受け止めていただいているのではないかと思う。ごみ屋敷でも、問題のある人ではなくて、地域に生きる仲間として、このことがまさにその方向性をきちんと捉えているのではないかと思う。例えば、通園、通学に困っていて、地域の方や高齢者のちょっとした手助けがあり、地域のおじさん、おばさんとしての関わりが生まれるようなマッチングがあれば、みんながそれぞれ自分らしく生きる、ということに繋がっていくことが可能になると思うので、それをぜひこの第5期地域福祉保健計画の中で打ち出していると、本来的な目標に近づくことができるのではないかと感じた。

コロナ禍の地域の変化もかなり感じているが、寄付や援助をしたい思いやこども食堂の援助を見ても、寄付文化のような大きな変化・高まりがあるように感じたし、そこをどうマッチングさせていくのか、という仕組みも考えていくチャンスなのではないかと感じている。ぜひ皆さんと事務局員の皆さんで取り組んでいければと思う。

(名和田委員長)分科会のところで、さらに深めた議論をしていきたいと思う。皆さん、御協力をありがとうございました。

報告

【報告1】第4期 横浜市地域福祉保健計画『区計画』策定状況（令和3年度～令和7年度）

【報告2】「個別支援と地域支援の融合Ⅲ～「身近な地域のつながり・支えあい活動推進事業」の取組から～」

「よこはまの地区社協活動～地区社協データ&事例集～（令和3年度版）」の発行について

(事務局)資料6、7、8について説明

(事務局)次回の計画検討会第1回は7月4日、計画検討会第2回目は11月15日に開催を予定しており、策定・推進委員会2回目については、2月中旬の開催予定で検討している。当日の議題など詳細については、改めて御連絡したい。また新型コロナウイルスの感染状況によってはオンライン開催の併用も検討しているので、その時々で御案内させていただきたい。本日は長時間にわたりまして、様々な御議論をいただきまして本当にありがとうございました。

閉会

資 料	<ul style="list-style-type: none"> ○令和4年度第1回横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 次第 ○横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会運営要綱 ○横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 委員名簿・事務局名簿 ○第4期 横浜市地域福祉保健計画 中間評価【手順2】確定版 (資料1) ○第4期 横浜市地域福祉保健計画 中間評価【概要版】確定版 (資料2) ○第5期 横浜市地域福祉保健計画策定について (資料3) ○第5期 横浜市地域福祉保健計画策定にかかる分科会について (資料4) ○分科会意見交換 参考資料 (資料5) <ul style="list-style-type: none"> ・横浜市をとりまく状況について (資料5-1) ・コロナ禍での生活困窮者における支援状況について (資料5-2) ・いわゆる「ごみ屋敷」対策について (資料5-3) ・地域の中で孤立してしまいがちな例（ひきこもり） (資料5-4) ・地域活動の状況 (資料5-5) ・誰もが安心して暮らせる地域にするために～包括的支援の必要性について～ (資料5-6) ○第4期 横浜市地域福祉保健計画『区計画』策定状況（令和3年度～令和7年度） (資料6) ○個別支援と地域支援の融合Ⅲ～「身近な地域のつながり・支えあい活動推進事業」の取組から～ (資料7) ○よこはまの地区社協活動～地区社協データ&事例集～（令和3年度版） (資料8)
-----	--